35 歳前後から 40 歳前後のひきこもりの人における居場所の意味

――居場所を設置する団体における社会福祉活動の役割――

山田武司/小木曽隆臣

はじめに
I. 研究の背景と目的
1. 研究の背景
2. 研究目的と方法
3.「ひきこもり」の定義
II. インタビュー調査の方法と内容
1. インタビュー調査の方法
2. インタビュー調査の内容
III. インタビュー調査の分析と考察
1. 分析及び考察の方法
2. カテゴリーの抽出
3. カテゴリーの分析及び考察
4. 発達の視点からみた考察
IV. まとめ
1. 35 歳前後から 40 歳前後のひきこもりの人における居場所の意味
2. 居場所を設置する団体における社会福祉活動の役割
おわりに

はじめに

本稿は，ひきこもりの長期化が懸念される中，今後，ひきこもりの人の中心的な年齢になると考えられる 35 歳前後から 40 歳前後のひきこもりの人における，居場所の意味を考察し明らかにするものである。さらに，この居場所の意味を通して居場所を設置する団体における社会福祉活動の役割についても考察を行う。

このひきこもりの人における居場所の考察は，福祉 NPO 団体が設置した居場所としてのひきこもりや神経症の人らの自助グループ「K 会」（以下 K 会という）を通して行う。具体的には，筆者の一人である小木曽隆臣が実施した K 会の参加者へのインタビュー調査を，山田武司及び小木曽が共同で研究し，執筆を行うものである。

この K 会は，先に述べたように福祉 NPO 団体が設置したものである。筆者の山田及び小木曽は，この福祉 NPO 団体の役員としてひきこもりの当事者や家族への支援に携わり，K 会及び調査対象者と関わりを持ってきた。特に小木曽は K 会の支援者（ソーシャルワーカー）として，調査

対象者とは日常的な関わりを持っている。本稿のインタビュー調査は，このような小木曽の日常的なK会へのソーシャルワーク支援の実践を通して行われたものである。

なお，本稿の執筆の分担は，「I. 研究の背景と目的」「II. インタビュー調査の方法と内容」を小木曽が担当し，「III. インタビュー調査の分析と考察」「IV. まとめ」を山田が担当した。

また，本稿のII及びIIIにおいては，調査対象者のプライバシーを保護するために，内容を損なわない程度に一部に変更を加えている。

I. 研究の背景と目的

ここでは，研究の背景として，ひきこもりに関する施策や先行研究，研究の目的と方法，ひきこもりの定義について述べる。

1. 研究の背景

ひきこもりに関する相談件数は年々増加をし，2009年度のひきこもりに関する行政機関（精神保健福祉センター，保健所，市町村）での相談件数は，「ひきこもり関連施策」（平成22年9月厚生労働省）によると延べ4万8105件に上っている。

このような状況の中で，2009年度に厚生労働省は「ひきこもり対策推進事業」を創設し，各都道府県・指定都市に，ひきこもりの第一次相談窓口としての機能を有する「ひきこもり地域支援センター」の整備を開始した。このセンターは，地域におけるひきこもりの第一次相談窓口としての機能とともに，関係機関とのネットワークの構築，及びひきこもり支援に関する情報発信を担う機関である。

この「ひきこもり地域支援センター」は，厚生労働省の「『ひきこもり地域支援センター』の設置状況リスト（2010年10月23日現在）」によれば，全国で28か所設置されており，その他，自治体単独での「ひきこもり専用相談窓口」が5県・2指定都市に設置されている。

また，ひきこもりの人がいる世帯数は，2010年6月に発表された「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」によると，25万5510世帯に上る。しかもこの数字については，「おそらくこれは推定値としては最小限のものと思われます」とされている（H19-こころ-一般-010，研究代表者・齊藤万比古2010：8）。

これだけのひきこもりの人がいるということを社会は決して見過ごすわけにはいかないであろう。この社会問題への対応策はいくつか提案されているが，新井・奥山はひきこもりの人に対し，「対人関係を補完するような中間施設（グループホーム・若者の居場所）の必要性が高まっている」（新井・奥山2004：106）と述べ，彼らが集える場所とその必要性について指摘している。

ひきこもりの人にとって，こうした対人関係を補完する場としての「居場所」は重要である。

なぜなら，ひきこもりの人は「人と関われない，人間関係を取り結べないことが問題」（武藤・渡辺 2001：155）であるため，居場所を通して「対人関係を高め，失敗に慣れていくことが可能」（新井・奥山 2004：106）であり，「そのために，同じような仲間から始めて，次第に慣れていくことが大切」（新井・奥山 2004：106）だからである。富田は，「人とふれあいたいのにふれあえない悩みこそ『ひきこもり』の本質的テーマ」（富田 2005：1146）と述べ，「人と関わって生きているからこそ，ときにわずらわしいこともあるけれど，まずはそのわずらわしさを受け入れていく覚悟を決めたときが，ひきこもりから旅立つチャンス」（富田 2005：1147）と指摘する。

「居場所」に注目したひきこもりの人に関する研究は，「ひきこもりの回復とは何か」についてインタビューを行った石川（2007）や，居場所にいられる要因について実践事例から論じた板東（2008）を始め，栗田（2008），豊田・森田ほか（2009），浅田（2010）を挙げることができる。しかし，いずれの研究についても，石川が述べているように，「私たちが把握できるのは支援団体や自助グループなどの場にアクセスしてきたケースだけであり，さらに私個人が接触できるのは，そのなかでもほんの一握りにすぎない」（石川 2007：13）という限界がある。したがって，ひきこもりの人の「居場所」に関する研究は，限られた関わりからにならざるを得ない研究であるといえる。だからこそ，多くの実践的な研究が求められているといえよう。

さらに，ひきこもりの人について，長年，実践的な研究を行ってきた竹中は年代によって「ひきこもり状況」にかなり大きな差異が生じることを指摘し，支援に対するニーズも異なったものになると述べている（竹中 2009：4）。そして，年代と家庭の状態を捉えることにより「ニーズと支援内容の適合性が高まる」とし，具体的には ① 思春期・青年前期群（15, 6歳前後から20歳前後），② 青年期群（20歳前後から35歳前後），③ 青年後期・壮年期群（35歳前後から40歳前後まで），④ 壮年期・高齢年期群（40歳以降から50歳以上…原文のまま）の4区分を提示している（竹中 2009：5）。

ひきこもりと年代に関しては，2003年7月に発表された，「10代・20代を中心とした『ひきこもり』をめぐる地域精神保健活動のガイドライン――精神保健福祉センター・保健所・市町村でどのように対応するか・援助するか」に，「注目すべきは35歳を超えるものも少なくない点である。またひきこもりの継続期間とまでは言えないが，最初の問題発生から10年が経過している事例も少なくなく，現在のひきこもり事例が長期化した場合，こうした壮年期の事例数も増加していくことが懸念される」（H12-こころ-001，主任研究者・伊藤順一郎 2003：123）と述べられている。

このひきこもりと年代に関しての研究や調査には，先に述べた研究のほか，境・川原ほか（2009）や，東京都青少年・治安対策本部（2008）の調査結果がある。

これらのひきこもりと年代に関しての研究・調査結果を踏まえれば，懸念されるひきこもりの長期化とともに，より近い将来には35歳前後から40歳前後がひきこもりの中心となり，彼らが対人関係を補完するような中間施設（グループホーム・若者の居場所）に関する研究が，早急に検討すべき重要な課題になると考えられる。

そこで，本稿では実践的な先行研究があまりなされていない，これらの年齢層に着目し，この年齢層におけるひきこもりの人にとっての「居場所」の意味について明らかにし，あわせて居場所を設置する団体における社会福祉活動の役割についても考察を行う。

2. 研究目的と方法

本稿の研究では，今後，ひきこもりの中心世代と推測される，35歳前後から40歳前後のひきこもりの人を対象に，ひきこもりの人が捉えている「居場所」の意味を明らかにすることを第一の目的とする。さらに，そこから居場所を設置する団体における社会福祉活動の役割についても考察を行う。なお，ここでの「居場所」とは，福祉NPO団体が設置したK会の活動を指す。

研究対象は，筆者らが関わるK会に集う35歳前後から40歳前後のひきこもりの当事者である。彼らに個別インタビューを行い，インタビュー・データを質的に分析し考察する方法を用いる。

3.「ひきこもり」の定義

本研究では，「ひきこもり」を竹中の「長年月にわたって，自宅（あるいは自室など）中心の生活を続け，社会生活（社会関係）を避ける傾向の強い人たち」（竹中 2007：1）と定義し，当事者が自分自身をひきこもりと認めている場合とする。

この定義の内容については，広いとの批判も考えられる。しかし，本研究と同じくひきこもりの居場所支援を取り上げた浅田のひきこもりの定義にも「本人がひきこもりと考えている」との記載があり，その根拠として「現実にひきこもりに悩んでいる当事者やその家族が支援を求めてやってきたときに，支援者の側がその訴えをひきこもりとするか否かを決めるわけではない。このような意味で，総合的なひきこもり支援を考えた場合，ひきこもりかどうかということを他人基準に基づいて厳格に判断する必要はなく，なるべく広く多くの人に用いられる」ことが挙げられている（浅田 2010：193）。

このことから，本研究においても竹中の定義がひきこもりの定義として妥当であると考える。

II. インタビュー調査の方法と内容

ここでは，インタビュー調査における調査対象者，調査方法，及び調査の内容としての「インタビュー・ノート」（インタビュー記録からのナラティヴの抜粋）を述べる。

1. インタビュー調査の方法

(1) 調査対象

調査対象者は，A市B区にある精神障害者らを支援する福祉NPO団体が，その活動の一つとして設置した，ひきこもりや神経症の人らの自助グループ「K会」に参加するひきこもりの人とした。

そして，このK会に参加しているメンバーのうち，研究の趣旨に賛同が得られた女性E氏（中学卒業後にひきこもる，K会に約9年間の参加），男性N氏（中学卒業後にひきこもる，K会に約1年半の参加），男性Y氏（大学中退後ひきこもる，K会に約1年半の参加）の3人に個別インタビューを行った。この3人はいずれも35歳前後から40歳前後である。

調査対象であるK会の概要は以下の通りである。

K会は2001年の福祉NPO団体の設立時（法人化）からまもなくしてスタートした。このK会の発足の特徴は「メンバーと職員・ボランティアが一緒になって創りあげてきたこと」（福祉NPO団体の会報26号）とされている。なお，ここでのメンバーとはK会の参加者であり，職員とは福祉NPO団体の職員のことである。

K会の参加者はそのつど3人から8人くらいで，経過とともに増減を繰り返しながらも，今日まで継続して開催されている。2年ほど前までは男女比，年齢層もさまざまであったが，近年では男性が多く，30代後半から40代半ばの参加者がほとんどである。

K会の活動は，週1回午後4時ごろから設置主体である福祉NPO団体の施設（小規模作業所）の一室に集合し，日常の話し合いをする。当日の参加者がそろったところで（おおよそ6時ごろ），ファストフード等の軽食を取りながら今後の企画を考える。また企画実施時には，花火，カラオケ等を楽しんだりしている。参加者には必要経費以外の会費等は一切かからない。

(2) 調査項目

本研究における調査項目は，「居場所」としての「K会」の活動をどう捉えているかである。

(3) 倫理的配慮

調査に先立ち，インタビュー調査の調査対象者に対し研究調査に関する説明を文書と口頭で行い，調査参加への同意を確認した。

確認した内容は，① インタビューを受ける者はその途中においてその中止等，インタビューを拒否する権利を持つこと，② インタビュー内容の取り扱いにおいて，個人が特定できないようにすること，③ インタビュー記録を作成した段階において，調査対象者に報告をし，記録の確認及び研究への意見を聴く機会を設けることの3点である。

なお，インタビューの実施に当たっては，設置主体である福祉NPO団体の施設長の許可を得

た上で，この福祉NPO団体の施設の静養室で行った。

(4) 調査方法

調査対象者の3人に対し，個別のインタビューを実施した。調査期間は2010年6月から7月である。なお，インタビューを行った小木曽は竹中が用いている「ある種の友人」[注)]（竹中2010：17）という立場でK会に参加しているが，この福祉NPO団体の理事も務めており，参加者はその点について理解している。

注）竹中は，「ある種の友人」について次のように述べている。なお，原文の「(筆者)」とは，竹中本人を指している。

「当事者の人たちと支援者（筆者）の関係は，原則として，日常生活での付き合いはしないものの，節度ある『ある種の友人』であると考えている。『当事者の人たち』は，ひきこもる本人について詳しく知っている（本人は，もちろん自分のことをよく知っている）。『支援者（筆者）』は支援について『多少の経験と経験に基づく判断力』を持っている。このような二者間の節度のある協力・共同の関係（共同支援関係）が『ある種の友人関係』の意味である。」（竹中2010：17）

2. インタビュー調査の内容

インタビュー調査から得られた「インタビュー・ノート」は次の通りである。なお，この「インタビュー・ノート」は，調査によって作成されたインタビュー記録から，分析に関わる調査対象者のナラティヴ・データを抜粋したものであるが，意味を持たない発声（無機能音）は省略した。

(1) Eのインタビュー・ノート

・K会を一緒に立ち上げて，自分で自分が安心できる居場所をつくった。自分が何か外で活動するための母体みたいな，安心できる居場所。

・ここで何かをしたいっていう人もすごくいるみたいだけど，私はちょっと意識が違って何かするのは自分でするっていう感じで，そのためにこの場所を使わせてもらっているという意識が割と強い方かな。私は，外で活動するための安息の場。

・ここでくだらない雑談をして，それによって心がほぐれて楽になって，それでまた，（外で）別のことができる場所。

・前（参加し始めの数年間）はもうK会しかないっていう感じで，実際，ほかにつながりは何にもなかったし，で，この場がすごく大事で，この場でいろんなことをしていきたいって気持ちがすごく強かった。

・何年かたって外で活動できることが増えてきたら，そしたら，この場で何かを一生懸命やるよりも，外の活動に重きをおきたいっていうところが強くなってきて，何かあったときに帰れる場所だったらいいなあっていうくらいにちょっと変化してきた。保険みたいな感じで，外で何かあったら，万一何かあったら帰って来れる場所にしておきたい。

・この場では安心感をもらって，この場で自分をどんどん発展させるよりも，外の世界で自分を発展させていきたい。

・私たちが（K会を）立ち上げたっていう意識があるし，新しい人が来たらホストのようにおもてなしをしなければという気持ちがあって，そういう役割があったから，こう何ていうんだろう，やってこれたっていう部分もある。それは，安息の部分でもあり，自分が役に立てる場所でもあるっていう気持ちでいたんだけど，だんだん疲れてきて。ここ1年くらいで新しいメンバーさんが入ってきたじゃないですか。そういう人たちは，私のその古い役割というか気を配るというのを必要としない人たちなんで，任せておけばいいのかなっていう気になりつつ，寂しいなっていう気持ちもありつつ，役割なくなったみたいなすっごい寂しい感じはあったなぁ。でも仕方ないなぁとも思ったけど。

(2) Nのインタビュー・ノート

・誰かに，そこに来ている人にやっぱり会いにくるっていうか，仲間のつながりっていう感じで，そういうのを求めて来ている感じだから。また，そこに来ている人のなんか知り合いっていうか，つながりが広がればと思って来ている。

・新しい人が一番望ましいんですけど，なかなか。なかなか僕だけで見つけようと思ったらなかなか難しいから。やっぱりそういうところに来ている人っていうのは，自分と近い感じの環境っていうか，まあ，そんなに一般的に働いている人とかそういうのじゃないから，やっぱり付き合いやすいというか分かりやすい。

・安心感はあるんじゃないかと思います。

・確かに今K会，いい感じなんですけど。やっぱこのままだらだらっていうか，この感じがいつまでも続かないっていうか，そんな感じってありますよね。なんか発展性がないっていうか，もう少しせっかくちょっと慣れてきて，いろいろ，うん，広がり持ってきたんだったら，次の展開を望むみたいな。ちょっと時間がたつにつれて感じが出てきたかな。

・やっぱりこのまま，なんか，週1回，なんかここに集まって話して，まあ楽しいですけど，でも10年20年考えたら，それだけではなんかやってけれないっていうか，やっぱりなんか先細りの感じがするし。

・（今の自分のままで就労を）受け入れてくれるところがあればできそうな感じがするんだけど，そういう場がなさそうっていうか，なんか，そこまでいくのがちょっと，無理そうっていうか怖いっていうか。

(3) Yのインタビュー・ノート

・社会につながる中間地点。自分だけだと家族の中でも切り離されているんで，とにかく所在がなくて社会につながりたいんだけど，世の中の役割からはアクセスできない。だから病院しかなくて，病院に通院するしかないんで，それだと社会に参加していることにはならないんで，と

にかくどこかに寄る辺がなかったので，そういう形でも所属してまあ同じような境遇の仲間を友達をつくりたかった。そうしないと人間関係がまったくなかったんで，そういうのを求めて探していた。

・自分も借りばっかりじゃなくて相手に何かを与えたい。みんなあると思うんですけど，その与えたいっていうのは社会と関わりたい。社会の中で役割を持って胸を張ってというか，自分も誰かに求められるような存在でないと，とにかく劣等感しかないっていうのが，養われているっていうか，家族にもそうだし，社会にもそうだし，負い目ばっかり受けて何も楽しいわけはない。だからスタート地点に立たないと，とにかくずっとマイナスのままなんで，そのスタート地点に立つためには社会に参加しなくちゃならなくて，でもいきなり働くとかは道筋がない。病院から何がつらいかといえば道筋がないことですよね。

・何か形だけでも，儲けにならなくても何か金が動く，誰かに与えて報酬が返ってくるっていう形だけでもないと，それは何かをやっていることにはならないですよ。関わりになってる。それで今公的にある作業所だとお金にならないし，食っていけるわけじゃないし，スキルが身に付くわけでもないし。

・とにかく人間関係こそが大事。ほかでは得がたい。ですから場所に行くっていうのは友達に会いに行く，友達をつくりに行く，友達に会いに行くことが一番大きいと思います。

・やっぱり人に会いに行く。だから人とのフィーリングというところが重視されるんじゃないですか。みんなそうじゃないかと思うんですよね。

・人がいる，目当ての人がいるというのが集まれる理由，だから出席率が悪くなると来なくなる。みんな来ると出席率が上がる。やっぱりみんな人に。

・グループがどんな組織であろうと宗教組織であろうと，そこに友達みたいな人がいて，気があって話し相手になってくれるというのがあれば，そこに行くんじゃないですか。とにかく人に集まる。グループっていうのはそんなに関係ないんじゃないですかね。

・きっちりしてないところがいい。いつ行ってもいいし，いつ帰ってもいい。遅刻とかすごく意識すると，予定の時間とか決まっていると眠れないんですよ。連絡入れなくてもいいじゃないですか。行かないときは何時までに連絡しなさいみたいなところもあるじゃないですか。そういうのはそれが重荷になるんですよ。連絡するのも嫌だし，そうするとこれからばっくれちゃおうか，ずっと行かないやってそんな感じになるんで。

III. インタビュー調査の分析と考察

ここでは，初めに ① インタビュー調査から得られたインタビュー・ノートの分析及び考察の方法を述べ，次に，② 分析によって抽出された居場所に関するカテゴリーを述べる。そして，③ そのカテゴリーの意味をナラティヴ・データから分析・考察するとともに，④ E.H. エリクソ

ンの発達論を中心にして居場所に関する考察を行う。

1. 分析及び考察の方法

インタビューの分析及び考察の手順は次の通りである。

① 初めに，小木曽のインタビュー記録を確認しながら，インタビュー・ノートのE・N・Yのナラティヴ・データにオープン・コーディングを行う（本稿では内容は省略する）。

② 次に，オープン・コーディングから，居場所に関する共通するカテゴリーを抽出する。

③ さらに，このカテゴリーの意味を調査対象者のナラティヴから分析・考察するとともに，エリクソンの発達論（35歳前後から40歳前後）を中心にして居場所の考察を行う。

2. カテゴリーの抽出

分析及び考察の手順で述べた方法により，調査対象者のナラティヴ・データから「つながり」「安心できる場」「参加者の将来」という3つのカテゴリーを抽出した。表1は，抽出したカテゴリーと，そのカテゴリーに含まれる主要なナラティヴをまとめたものである。

但し，この3つのカテゴリーは，それぞれ独立したものではなく，カテゴリーにおけるナラティヴの重なりもあり，相互に密接に関係し合うものである。

3. カテゴリーの分析及び考察

前節で述べたように調査対象者のナラティヴから「つながり」「安心できる場」「参加者の将来」という3つのカテゴリーが抽出された。このカテゴリーの意味を，E・N・Yのナラティヴ・データから分析し考察を行う。

(1) 「つながり」の意味の分析と考察

K会という居場所への参加が約9年であるEは，参加し始めの数年間は「もうK会しかないっていう感じで，実際，ほかにつながりは何にもなかった」と語り，居場所のみが人とのつながりの場であり，そこにつながりを求めていた。

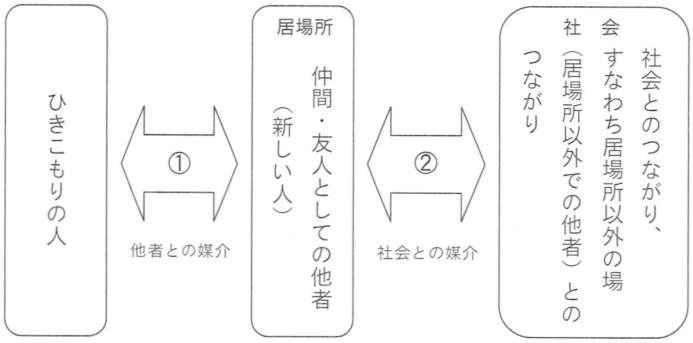
N及びYは居場所への参加は約1年半であり，Eの参加数年後に当たる時期である。Nは「仲間のつながりっていう感じで，そういうのを求めて来ている」と語り，Yも「友達をつくりに行く，友達に会いに行くことが一番大きい」と，Eと同様に居場所に人（仲間・友人）とのつながりを求めている。

しかし，Eが数年後に，「外で活動できることが増えてきたら，そしたら，この場で何かを一生懸命やるよりも，外の活動に重きをおきたいっていうところが強くなってきて」と語っている

表1　カテゴリーと語り

	つながり	安心できる場	参加者の将来
E	（参加し始めの数年間は）「もうK会しかないっていう感じで，実際，ほかにつながりは何にもなかった」 「何年かたって外で活動できることが増えてきたら，そしたら，この場で何かを一生懸命やるよりも，外の活動に重きをおきたいっていうところが強くなってきて」	「自分が安心できる居場所をつくった」 「自分が何か外で活動するための母体みたいな，安心できる居場所」 「何かあったときに帰れる場所」 「雑談をして，それによって心がほぐれて楽になって，それでまた，（外で）別のことができる場所」 「新しい人が来たらホストのようにおもてなしをしなければという気持ちがあって，そういう役割があった〔略〕安息の部分でもあり，自分が役に立てる場所でもあるっていう気持ちでいたんだけど，だんだん疲れてきて。ここ1年くらいで新しいメンバーさんが入ってきた〔略〕そういう人たちは，私のその古い役割というか気を配るというのを必要としない人たちなんで，任せておけばいいのかなっていう気になりつつ，〔略〕役割なくなったみたいなすっごい寂しい感じはあったなぁ。でも仕方ないなぁとも思ったけど」	「この場では安心感をもらって，この場で自分をどんどん発展させるよりも，外の世界で自分を発展させていきたい」
N	「仲間のつながりっていう感じで，そういうのを求めて来ている」 「新しい人が一番望ましいんですけど，なかなか。なかなか僕だけで見つけようと思ったらなかなか難しいから」	「自分と近い感じの環境っていうか，まあ，そんなに一般的に働いている人とかそういうのじゃないから，やっぱり付き合いやすいというか分かりやすい」 「安心感はある」	「確かに今K会，いい感じなんですけど。〔略〕発展性がないっていうか，〔略〕次の展開を望むみたいな」 「このまま，なんか，週1回，なんかここに集まって話して，まあ楽しいですけど，でも10年20年考えたら，それだけではなんかやってけれないっていうか，やっぱりなんか先細りの感じがするし」 「（今の自分のままで就労を）受け入れてくれるところがあればできそうな感じがするんだけど，そういう場がなさそうっていうか，なんか，そこまでいくのがちょっと，無理そうっていうか怖いっていうか」
Y	「社会につながる中間地点」 「自分だけだと家族の中でも切り離されているんで，とにかく所在がなくて社会につながりたいんだけど，世の中の役割からはアクセスできない」 「同じような境遇の仲間を友達をつくりたかった」 「人間関係こそが大事。〔略〕友達に会いに行く，友達をつくりに行く，友達に会いに行くことが一番大きい」	「同じような境遇の仲間を友達をつくりたかった」 「そこに友達みたいな人がいて，気があって話し相手になってくれるというのがあれば，そこに行く」 「きっちりしてないところがいい。〔略〕予定の時間とか決まっていると眠れないんですよ。連絡入れなくてもいいじゃないですか。行かないときは何時までに連絡しなさいみたいなところもあるじゃないですか。そういうのはそれが重荷になる」	「自分も借りばっかりじゃなくて相手に何かを与えたい。みんなあると思うんですけど，その与えたいっていうのは社会と関わりたい。社会の中で役割を持って胸を張ってというか，自分も誰かに求められるような存在でないと，とにかく劣等感しかない〔略〕スタート地点に立つためには社会に参加しなくちゃならなくて，でもいきなり働くとかは道筋がない。病院から何がつらいかといえば道筋がないことですよね」 「何か形だけでも，儲けにならなくても何か金が動く，誰かに与えて報酬が返ってくるっていう形だけでもないと，それは何かをやっていることにはならないですよ。関わりになってる。それで今公的にある作業所だとお金にならないし，食っていけるわけじゃないし，スキルが身に付くわけでもないし」

図1 「つながり」の意味としての「媒介の機能」



ように，つながりの重点は居場所から「外の活動」へと移っていった。このことからは，居場所とのつながりが，Eと社会とのつながりを支える形での媒介の機能を果たしたと考えられる。

また，Nは居場所につながりを求めているのであるが，Nは「新しい人が一番望ましいんですけど，なかなか。なかなか僕だけで見つけようと思ったらなかなか難しいから」とも語っている。この語りからは，居場所を通して「新しい人」とのつながり，広がりを求めていることが考えられる。

さらに，Yも居場所につながりを求めているのであるが，居場所を「社会につながる中間地点」と語り，「自分だけだと家族の中でも切り離されているんで，とにかく所在がなくて社会につながりたいんだけど，世の中の役割からはアクセスできない」と語っている。この語りからは，家族から切り離された孤独の中で，居場所を通して友人をつくるだけではなく，「社会とのつながり」を求めていることが考えられる。そして，Yは，ひきこもる生活を通して，さも身近で基本的なつながりである家族からも，言い換えれば，すべてのつながりからも切り離された状態の中で，居場所に最初のつながりを求めていると考えることができる。

以上のことから，居場所における「つながり」の意味とは「媒介の機能」ということができる。これは，図1に示したように，① ひきこもりの人と他者（仲間・友人）をつなげる機能，及び ② 居場所を支えとして，または居場所を通して社会とつなげる機能としての「媒介の機能」としての意味があるということである。

(2) 「安心できる場」の意味の分析と考察

E・N・Yとも，居場所での他者とのつながりとともに，安心できる場を語っており，居場所がつながるための安心感をつくっていると考えられる。

安心できる場に関して，EはK会のメンバーとK会の活動をする中で，「自分が安心できる居場所をつくった」と語っている。この安心できる居場所とは「自分が何か外で活動するための母体みたいな」場であり，それは「何かあったときに帰れる場所」であって，「雑談をして，それによって心がほぐれて楽になって，それでまた，（外で）別のことができる場所」と語っている。

このことから，K会への参加後，約9年間たったEにとっての安心できる場の意味は，外での活動のために自分にエネルギーを与える場であり，外での活動で何かあったときに帰ることができる安全基地の意味があるということができる。そして，この安全基地としての人間関係は，Eを支えてくれる関係であり，Eが「雑談」によってと語っているように，長年K会の活動をともにした他者としての仲間・友人と，相互に支え合える関係であるといえるであろう。

また，Eは，「新しい人が来たらホストのようにおもてなしをしなければという気持ちがあって，そういう役割があった〔略〕安息の部分でもあり，自分が役に立てる場所でもあるっていう気持ちでいたんだけど」とも語っている。この語りからは，この相互に支え合える友人関係の前段階としての，「社会的役割」による関係性を考えることができる。

肯定的な視点からいえば社会的役割を担うことで，特に新しい他者との関係をつくるきっかけを持つことができ，この役割を遂行することによって安定した関係性を保つことができる。さらに，その役割を他者から認められることにより自己肯定感を高め，アイデンティティの獲得へとつなげることができると考えられる。

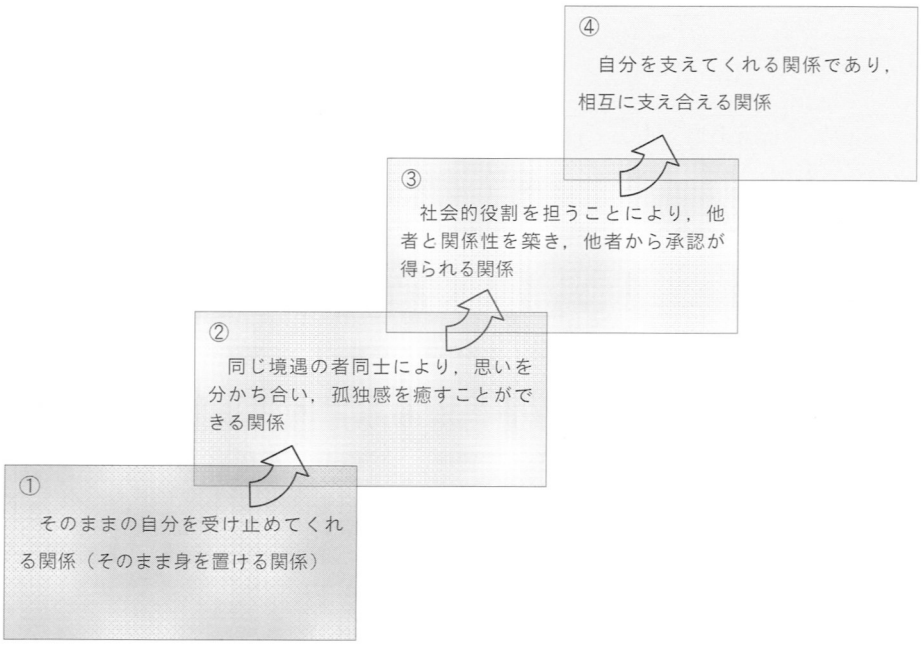
しかし，Eは，「ホスト」の役割を担わざるを得なかったということも推測できる。K会への参加し始めの数年間は，「もうK会しかないっていう感じで，実際，ほかにつながりは何にもなかった」状況であったEにおいては，唯一のつながりを保ち続けるために，この役割を担い続けなければならなかったことが考えられるからである。この点は，Eの「だんだん疲れてきて」という語りからも読み取ることができる。

Eの他者とのつながりは，K会が唯一のつながりの時期から，K会以外の外の世界に広がっていた。この広がりの中で，Eの居場所としてのK会の意味が，先に述べたように変化をしていったと考えられる。そして，この変化の中で，新しい参加者との関係に対してEが，「私のその古い役割というか気を配るというのを必要としない人たち」と語っているように，Eは無理に「ホスト」の役割を担わなくとも，新しい他者とつながりを持つことができる力を獲得することができるようになっていったと考えられる。このことは，EがK会において，「すっごい寂しい感じ」を持ちながらも以前の役割に戻ることなく，新たな社会関係と社会的役割を結ぶことができたともいうことができる。

Nの場合はどうであろうか。新井・奥山が，「同じような仲間から始めて，次第に慣れていくことが大切」（新井・奥山 2004：106）と述べているように，参加約1年半のNは，「自分と近い感じの環境っていうか，まあ，そんなに一般的に働いている人とかそういうのじゃないから，やっぱり付き合いやすいというか分かりやすい」とK会での他者との関係を語っている。このように，「自分と近い感じの環境」の他者と関わることにより，お互いに分かり合え，思いを分かち合うことにより，孤独感を癒すことができると考えられる。

さらに，Yは，Nと同様に「同じような境遇の仲間を友達をつくりたかった」と語るとともに，「そこに友達みたいな人がいて，気があって話し相手になってくれるというのがあれば，そこに行く」と語っている。しかし，このYの他者との関係は，EやNの相互に支え合う関係や

図 2 「安心できる場」の意味としての「安心できる人間関係」



理解しあう関係ではなく，「友達みたいな人」「気があって話し相手になってくれる」人というように，自分を受け止めてくれる関係を求めていると考えられる。

このことは，富田が「人とふれあいたいのにふれあえない悩みこそ『ひきこもり』の本質的テーマ」（富田 2005：1146）と述べているように，相互にふれあうことが不安な中では，自分を脅かす関係でなく，自分をそのまま受け止めてくれる関係が始めに求められることを表している。この点は，Y の語る「きっちりしてないところがいい」「何時までに連絡しなさいみたいなところもあるじゃないですか。そういうのはそれが重荷になる」という語りからも読み取ることができる。

以上のことから，居場所における「安心できる場」の意味とは，「安心できる人間関係を営む場」ということができる。ここでの他者との関係性は，図 2 に示したように，① 人とふれ合えない中での，そのままの自分を受け止めてくれる関係，言い換えれば，そのまま身を置ける関係であり，② 同じ境遇を生きてきた者同士による，思いの分かち合いによって孤独感を癒すことができる関係，そして，③ 居場所の中で社会的役割を担うことにより，他者から承認が得られる関係，さらに，④ E が「何かあったときに帰れる場所」「母体」と語っているように，自分を支えてくれる関係であり，相互に支え合える関係ということができる。

また，これらの関係性は単に人によって異なるものとみるべきではない。居場所に参加する者の心理・社会的な状況に応じて，図 2 のように①から④へとつながる，関係性の発達の段階であり，それは，一定の重なりを持ちながら発達していく段階であろう。

(3) 「参加者の将来」における「居場所」の意味の分析と考察

E・N・Yは，居場所としてのK会への参加を通して，将来の自分を語っている。なお，ここでいう「将来」とは，何年も先のことのみを指すのではなく，現時点以降の今後も含むものである。

Eは，「この場では安心感をもらって，この場で自分をどんどん発展させるよりも，外の世界で自分を発展させていきたい」と，K会を自分の外での活動の支えとして，K会以外での自分を発展させていきたいと語っている。

なお，本稿でのインタビュー調査では具体的には語られなかったが，Eが行っているK会以外での活動は，サークル的な活動でありアルバイトも行っているが，特に就労にはこだわっていない。

また，Nは，「確かに今K会，いい感じなんですけど。〔略〕発展性がないっていうか，〔略〕次の展開を望むみたいな」と語り，具体的には「このまま，なんか，週1回，なんかここに集まって話して，まあ楽しいですけど，でも10年20年考えたら，それだけではなんかやってけれないっていうか，やっぱりなんか先細りの感じがするし」と語っている。

その上でNは，就労に対する不安として「(今の自分のままで就労を) 受け入れてくれるところがあればできそうな感じがするんだけど，そういう場がなさそうっていうか，なんか，そこまでいくのがちょっと，無理そうっていうか怖いっていうか」と語っている。

Nの語りは，自分の就労を不安のために否定して，自分のことではなく居場所であるK会での活動の発展性を危惧している。このNの語りを「参加者の将来」のカテゴリーに入れたのは，これまで，「つながり」及び「安心できる場」のカテゴリーを分析・考察する中でみてきたように，現在のNのつながりとNの社会はK会のみであり，NはK会の発展と自分の将来の発展を同一視していると捉えることができるからである。すなわち，Nが望むK会の「次の展望」はイコールN自身の「次の展望」であり，居場所が自分を発展させる場となっていると考えることができる。

一方Yは，「自分も借りばっかりじゃなくて相手に何かを与えたい。みんなあると思うんですけど，その与えたいっていうのは社会と関わりたい。社会の中で役割を持って胸を張ってというか，自分も誰かに求められるような存在でないと，とにかく劣等感しかない」と語り，社会との関わりや社会の中での役割を求めるとともに，今は劣等感しかない現在の自分を語っている。

そして，その社会との関係性に関して具体的に，「何か形だけでも，儲けにならなくても何か金が動く，誰かに与えて報酬が返ってくるっていう形だけでもないと，それは何かをやっていることにはならないですよ」と，就労を通して金銭をもらうことを求めている。

さらにYは，K会に関して直接語っているのではないが，「スタート地点に立つためには社会に参加しなくちゃならなくて，でもいきなり働くとかは道筋がない。病院から何がつらいかといえば道筋がないことですよね」と語り，K会に参加した理由を，将来の社会参加のために，就労を通して社会の中で役割を持つための道筋をつけるための場として捉えている。

しかし，このYの語りからは，一気に自分の理想へと向かおうとする思いが感じられ，それがYの葛藤を深めているとも考えられる。

なお，E・N・Yの社会参加と就労に関しては，Yが就労を中心に社会との関わりを考えて，就労できない自分に劣等感を抱き，また，Nが不安な就労をわざわざ語っているのに対して，Eは特に就労にこだわっていないという違いがある。

このNとYの語りは，男性においては，35歳前後から40歳前後という就労が当然となっている同年代の世代と自分との比較や，男性は働いて金を稼ぐことで一人前といわれる社会的な規範としてのドミナント・ストーリーから発せられていると考えられる。それに対してEが就労にこだわっていないのは，女性においては必ずしも就労のみが求められていない社会的な規範（家事手伝いや専業主婦なども許容される）としてのドミナント・ストーリーが存在するためと考えられる。

この社会参加と就労に関して，竹中は，35歳前後から40歳前後を「青年後期・壮年期群」として，この年代のひきこもる人に対して「ひきこもる人は，長く働かないことによって，ますます社会的疎外感を深め，気力・体力を喪失し，家族関係も不安定にしてしまいがちである」と述べ，「このことがさらに働くことに対する抵抗を強める」と述べている（竹中 2010：160）。そして，「問題を克服するためには，『働き方の視点の変革』が必要である」と述べ，「雇用型の就労だけではなく，多様な働き方（ボランティア活動，家事・家業手伝い，その他）を考えることである。さらに進んで言えば，このような多様な働き方を社会が受容・評価する（所得保障につなげる）ことである」と述べている（竹中 2010：161）。

以上のことから，「自分の将来」における「居場所」の意味とは，自身の「発展」としての「自己実現を支える場」ということができる。

EとNは将来を示すのに「発展」と語り，Yは「社会の中で役割を持って胸を張って」と語っているが，このYの語りも一つの自分の「発展」を表しているものと捉えることができる。E・N・Yの語りから，自分の将来の「発展」に対して居場所に求めているものは，それぞれに応じて，① 外での自分の発展を支える場，② 居場所の中で自分を発展させる場，③ 就労し社会の中で発展するための道筋をつける場である。この「発展」はE・N・Yのそれぞれの理想に向けた可能性の発揮としての「自己実現」と言い換えることができ，居場所は「自己実現」を支える場と捉えることができる。

4. 発達の視点からみた考察

E.H.エリクソンは，成人期を「初期成人期」「成人期」「成熟期」の3つに分けており（E.H. Erikson 1982：158），本稿が対象とする35歳前後から40歳前後までの年齢は，「初期成人期」（early adulthood）から「成人期」に至る時期となる。

このE.H.エリクソンの発達論を中心にして，35歳前後から40歳前後の心理・社会的発達の視点から居場所に関しての考察を行う。

(1)「初期成人期」の心理・社会的危機からみた考察

E.H.エリクソンは,「初期成人期」の心理・社会的危機として「親密さ対孤独」を挙げている。この親密さとは,「異性との真の『親密さ』であり,または,これと関連した他の人との親密さないし自分自身との親密さ」(E.H. Erikson 1982:119)である。

また,E.H.エリクソンの発達論を基盤にしているバーバラとフィリップは,「親密さ」に関して,「親密性とは,親しみを増す過程において,自分自身の同一性を失うのではないかという恐れを感じることなく,他者とオープンに精神的に支えあい,やさしさに満ちた関係を経験できる能力と定義される」と述べている(B.M. Newman & P.R. Newman 1988:366)。

この「親密さ」に対するものが「孤独」であるが,「孤独」に関してE.H.エリクソンは,「自己の同一性について確信のもてない青年は,人間関係の親密さからしりごみしてしまう」と述べ,「親密さの対象は『隔たり』である。すなわち,拒絶したり,孤立したり,存在が自己の存在にとって危険に見える力や人を破壊したりする傾向である」と述べている(E.H. Erikson 1982:119–120)。

ひきこもりの人は「人と関われない,人間関係を取り結べないことが問題」(武藤・渡辺 2001:155)とされているように,調査対象者の3人は,それぞれ中学卒業後または大学在学中にひきこもりを始めており,自我同一性の獲得が十分ではなく,他者とのつながりとしての親密な関係の獲得に非常な困難を抱えていることが推測できる。バーバラとフィリップが,「親密性の感覚が獲得される中心的過程は,仲間同士の相互性である」(B.M. Newman & P.R. Newman 1988:370)と述べているように,ひきこもりの人と他者を仲間としてつなぐ(媒介する)居場所の機能は,仲間同士の相互性を支え,「親密さ」を獲得していく過程を支える機能としての重要性がある。

しかし,「初期成人期」の発達課題としての「親密さ」は,容易に獲得ができるものではない。E.H.エリクソンは,「他人たちと本ものの『かかわりあい』を結ぶことは,確固たる自己確立の結果であると同時に,自己確立の試練でもある」と述べ,「自己確立が未だの場合,〔略〕暫定的な形での遊戯的な親密さを求める時に,まるでこのような暫定的なかかわりあいが,同一性の喪失をひきおこしそうな対人的融和になってしまうのではないかという緊張」を生じ,「他者との融合は同一性の喪失になってしまう」と述べている(E.H. Erikson 1982:164–165)。

このことから,「親密さ」を獲得していくためには,他者との融合から自分を守ることができる関係性としての「安心できる人間関係」が必要である。

次に,ひきこもる人と「孤立」から,この「安心できる人間関係」について考えてみたい。人は「孤立」をどのように生きていくのであろうか。E.H.エリクソンは「孤立」を「誰からも離れ,『誰からも目を向けられぬ』状態にあることへの恐怖」であると述べ,最大の危機は,「同一性の葛藤が退行と敵意をまじえて再燃」し,「退行しやすい条件が備わっている場合に,原始的他者との最初期の葛藤に固着する」ことであると述べている(E.H. Erikson & J.M. Erikson 2001:94)。この「原始的他者」とは「母親的人物つまり最初の自己愛的鏡映と愛着の対象」(E.H. Erikson & J.M. Erikson 2001:41)とされている。

Yはひきこもるという退行しやすい条件の中で過ごし，「家族の中でも切り離されている」「世の中の役割からはアクセスできない」と語っている。この「家族の中でも切り離されている」という語りからは，「基本的信頼」の葛藤を含めた親との葛藤と，それによる家族の中での孤立感をうかがうことができる。そして，「世の中の役割からはアクセスできない」という語りからは，一般的な社会関係から取り残され，「誰からも目を向けられぬ状態」の中での孤立感をみることができる。

このような葛藤と孤立感は，対人関係を求めながらも他者との関わりに大きな不安と恐れをもたらすと考えることができる。このようなひきこもりの人にとっては，他者との融合ではなく，自分がそのまま受け止められることによって，他者と関係をつないでも自分が脅かされない関係性が必要となる。自分を守ることができる安全な場（「安心できる場」）としての居場所においては，そのまま受け止められるという関係性が，「安心できる人間関係」の基盤としての要素となる。

(2)「成人期」の心理・社会的危機からみた考察

E.H.エリクソンは，「初期成人期」の次の段階である「成人期」の心理・社会的危機として「生殖性対停滞」を挙げている。この「生殖性」はE.H.エリクソンによれば，「子孫を生み出すこと，生産性，創造性を包含するものであり，更なる同一性の開発に関わる一種の自己-生殖(self-generation）も含めて，新しい存在や新しい製作物や新しい観念を生み出すことを表している」（E.H. Erikson & J.M. Erikson 2001：88）とされている。

また，バーバラとフィリップは，E.H.エリクソンのいう「成人期」を「成人中期」（middle adulthood）として表し，「成人中期にあって人は，日常活動にたいしてそれが人生にどのような意味をもっているのかを明確に意味づけなくてはならない。生殖性のある部分は，創造性という目標を達成させることでもある。さらに，人生の仕事にたいしてその願望をもちこませることでもある」（B.M. Newman & P.R. Newman 1988：429）と述べている。

さらに，岡本は，E.H.エリクソンのいう「成人期」を「中年期」と表し，この「同一性」に関して，「中年期のライフ・レヴュウでは，人生半ば過渡期にあって，これまでの人生の欠落した部分や影になっていた自分を見直し，現実の自分のあり方，生き方の中に統合していくこと，つまり，人生後半期の生き方とアイデンティティの再構築が行われる」（岡本2005：68）と述べている。そして，この「人生の見直し」に関して，「自分の人生の見直しは，現在の自分と社会や関わりのある人とのつながりという水平軸と，過去の自分，現在の自分，将来の自分という垂直軸，つまり時間軸にそった自分のあり方の2つの次元で行われる」（岡本2005：68）と述べている。

35歳前後から40歳前後は，この「成人期」に移行する時期であり，「成人期」の発達課題である，生殖性・生産性・創造性からなる，更なる同一性の開発（アイデンティティの再構築）へ向かう時期となる。それは，過去から現在にいたる日常の活動の中における自分の人生における意味を，人生の後半としての未来へ向かう自分を見つめる中で，見直していく作業となる。

居場所に参加するひきこもりの人においては，居場所での活動，または居場所を基盤とした社会での活動において，過去から現在にいたる自分の人生の意味を，未来へ向かう自分を見つめる中で見直すことになる。

しかしひきこもりの人にとっては，自分の過去や現在，そして未来を肯定的に受け止めることが困難な場合がある。このような状況の中で，時間軸での自分の統合を行うには，まずは現在を肯定できる状況にしなければならない。そして，過去を，肯定的な現在にいたった過去として捉え直し，未来を，肯定的な現在の発展として捉えなければならない。このように居場所での現在の活動は，アイデンティティの再構築に向けたその過程を支えていく機能を持つことになる。

なお，「生殖性」に対する「停滞」に関しては，E.H. エリクソンは，この生殖性的充実に完全に失敗すると，「擬似-親密性への脅迫的要求という形か，あるいは自己像への一種の脅迫的な耽溺という形で，過去の段階への退行が生ずる。また，いずれの形の退行にも，深い停滞感がつきまとう」（E.H. Erikson & J.M. Erikson 2001：89）と述べている。

IV. まとめ

本稿で行ってきた質的な研究は35歳前後から40歳前後の3人の参加者のみを対象としており，統計的な研究から一般化を求めたものではない。しかし，この一片の研究から，援助実践における居場所の意味に関して，その本質に迫ることができたと考える。

本稿では，35歳前後から40歳前後のひきこもりの人であるE・N・Yの語りの分析と考察を通して，ひきこもりの人における居場所の意味について，①「つながり」の意味としての「媒介の機能」，②「安心できる場」の意味としての「安心できる人間関係を営む場」，③「参加者の将来」を支える意味としての「自己実現を支える場」の3つを明らかにした。

これらの居場所の意味は，「ひきこもりの人の『自己実現』の願いを支えながら，ひきこもりの人が現在を肯定的に捉えることができるための支援」につながっていかなければならない。

ここでは，この点を踏まえ，これまでカテゴリーごとに別々に述べてきたE・N・Yの語りの分析及び考察を，E.H. エリクソンを中心とした発達論を踏まえてまとめ直すことにより，35歳前後から40歳前後のひきこもりの人における居場所の意味を簡潔に論じ，最後に，居場所を設置する団体における社会福祉活動の役割に関して考察を行う。

1. 35歳前後から40歳前後のひきこもりの人における居場所の意味

(1) 「初期成人期」と居場所の意味

35歳前後から40歳前後は，E.H. エリクソンの発達論によれば「初期成人期」から「成人期」にいたる時期となる。

E.H.エリクソンは，「初期成人期」の心理・社会的危機として「親密さ対孤独」を挙げている。この親密さとは，「異性との真の『親密さ』であり，または，これと関連した他の人との親密さないし自分自身との親密さ」（E.H. Erikson 1982：119）である。

居場所における「つながり」の意味とは「媒介の機能」であるが，この機能には，① ひきこもりの人と他者（仲間・友人）をつなげる機能，② 居場所を支えとして，または居場所を通して社会とつなげる機能の2つがある。このうち，居場所の中で，ひきこもりの人と他者を仲間・友人としてつなぎ媒介していく機能は，「親密さ」を獲得する過程の上での基盤となる。

しかし，この「親密さ」は容易に獲得ができるものではなく，同一性の喪失の危険を含むものである。他者との関わりに大きな不安を持つひきこもりの人にとっては，居場所は，そのままの自分が受け止められ，他者と関係をつないでも自分が脅かされない「安心できる人間関係を営む場」でなければならない。

居場所の意味としての「安心できる人間関係を営む場」は，一定の重なりを持ちながら発達していく他者との関係性の段階としてみることができる。この段階は，① 人とふれ合えない中での，そのままの自分を受け止めてくれる関係（そのまま身を置ける関係），② 同じ境遇を生きてきた者同士による，思いの分かち合いによって孤独感を癒すことができる関係，③ 居場所の中で社会的役割を担うことにより，他者から承認が得られる関係，④ 自分を支えてくれる関係であり，相互に支え合える関係という段階である。

居場所において，この「安心できる人間関係」の段階を経て，居場所の「媒介の機能」としての社会とのつながりが進められ，居場所以外での「親密さ」の獲得が進められていくのであろう。

(2) 「成人期」と居場所の意味

E.H.エリクソンは，「成人期」の心理・社会的危機として「生殖性対停滞」を挙げている。この「生殖性」は，生殖性・生産性・創造性からなる「更なる同一性の開発」である（E.H. Erikson & J.M. Erikson 2001：88）。そして，「成人期」においては，「新しい存在や新しい製作物や新しい観念を生み出す」（E.H. Erikson & J.M. Erikson 2001：88）。

この「更なる同一性の開発」としての「アイデンティティの再構築」（岡本2005：68）は，過去から現在にいたる自分の日常での活動の中から，そして過去から現在さらに未来へ向かう自分を見つめる中から，自分を見直していくことで獲得していくことができる。

また，日常の活動は，これまで述べてきたように居場所の「安心できる人間関係を営む場」による，居場所での活動としての他者との関係性から培われ，その関係性を基盤に社会（居場所以外の場）へと活動が広がっていくことになる。

居場所の参加者であるE・N・Yの「参加者の将来」における語りから読み取れたものは，ネガティブなニュアンスを含みながらも，自分の将来への「発展」の望みであり，「自己実現」としての新しい自分の存在への希望である。しかし，自分の「発展」を確信し，自分の過去・現

在・未来を肯定的に捉えているとはいいがたい。さらに，ひきこもりの人においては否定的な過去及び現在を覆い隠すように，一気に未来の「自己実現」に向かうことを望み，葛藤を深めていく者もいるであろう。

居場所は，そこに参加するひきこもりの人が現在を肯定できる状況にすることが必要となる。それは，居場所が他者と社会をつなぎ（媒介し），「安心できる人間関係を営む場」となることである。このことにより，困難な過程ではあるが，過去を，肯定的な現在にいたった「過去」として捉え直し，未来を，肯定的な現在の発展として捉えることができる。そして，この状況の中で，自分の人生の意味を肯定的に見直すことができると考えられる。

E・N・Yは，それぞれ，現在の不安を抱きながらも未来の自分の「発展」としての「自己実現」を願い，居場所の意味を，① 外での自分の発展を支える場，② 居場所の中で自分を発展させる場，③ 就労し社会の中で発展するための道筋をつける場として語っている。この語りからいえるように，居場所は，ひきこもりの人の「自己実現」の願いを支えながら，ひきこもりの人が現在を肯定的に捉えることができるための支援を行う場でなければならない。

2. 居場所を設置する団体における社会福祉活動の役割

本稿において居場所の意味とともに「居場所を設置する団体における社会福祉活動の役割」の考察を行うのは，社会福祉活動（ソーシャルワーク）の役割が，これまで述べてきた居場所の意味に重なり，また，それを超える視点を持つからである。

社会福祉活動の役割は，クライエントと環境との間の相互作用に働きかけ，その機能不全を改善することである。そして，クライエントをアドボケイト（権利擁護）するとともにエンパワメント（力を高める支援）し，社会にインクルージョン（包含）することでもある。さらに，「生活」の支援として，「生活」の中でクライエントの自己実現を支えていくことも役割となる。

この社会福祉活動をひきこもりの人における居場所の支援に当てはめるならば，社会福祉活動は，その役割として，ひきこもりの人の初めの環境である居場所に参加する他者とクライエントに働きかけ，その関係をつないでいく。そして，クライエントのつながりの関係を居場所以外の人（社会）に広げていく支援といえる。

特に，「初期成人期」から「成人期」に向かう35歳前後から40歳前後のひきこもりの人においては，青年期のアイデンティティの獲得が不十分なままで，アイデンティティの再構築として，自分の人生の意味を見直さなければならない。それは，社会とのつながりの中での自分の生き方を問い，自分とは何かを問い直すことである。

社会福祉活動は，その役割として，社会へのインクルージョンを目指している。それは，ひきこもりの人と社会とを隔てる壁を取り払い，社会の中にひきこもりの人が「安心できる場」をつくることである。言い換えれば，ひきこもりの人が，居場所を通してまたは居場所を支えにして，居場所以外の他者と関わり合い，社会と安心して関わっていける支援を行うということであ

る。この支援によって，ひきこもりの人は社会とつながり，その中で「自分」の意味を考えることができるのである。

また，この社会へのインクルージョンのためには，社会福祉活動は，ひきこもりの人へのエンパワメントを行って，アイデンティティの再構築を含めた心理・社会的な成長（発達）を促すとともに，アドボカシー（システム・アドボカシーを含む）を進めることによって社会の変革や社会的文脈の変革を目指すことが求められる。

さらに，社会福祉活動は，ひきこもりの人と社会との関係性の中で，ひきこもりの人の可能性が発揮できる環境を目指し，ひきこもりの人の「自己実現」を支えていくことが役割となる。

以上の社会福祉活動の役割からみることができるように，青年期以降（特に35歳前後から40歳前後）のひきこもりの人の居場所を設置する団体は，その団体が「社会福祉」を打ち出している，いないにかかわらず，実質的な社会福祉活動を目指すことで，居場所の機能の意味を拡充させることができるといえる。

おわりに

2010年12月1日に，保健所のある精神保健福祉相談員が亡くなった。彼女は，いつも接する人に明るさを与えてくれた方だった。そして，ひきこもりの人を始め，精神的な病（障害）を抱える人たちの傍らに座り，一緒に喜び・悩み・苦しみ，ときには励まし，ときには真剣に注意をする，共に生きてくれた方であった。

本稿で取り上げた福祉NPO団体を，そしてK会の参加者を長年支えてくれたのも彼女である。筆者である山田や小木曽も，彼女にどれだけ助けられ励まされたことだろう。本研究の対象であったK会，及びK会の設置主体である福祉NPO団体が今日まで来られたのも，彼女のおかげである。

筆者である私たちの心の中で，今も気さくに呼びかけてくれている彼女の優しい声と姿を抱きながら，ここに，心から「本当にありがとう」という感謝の思いとともに，謹んで哀悼の意を表するしだいである。

（2010年12月10日）

〔引用文献〕

厚生労働省「ひきこもり関連施策」（平成22年9月）
http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/hikikomori01.pdf（2010.11.25取得）

厚生労働省「『ひきこもり地域支援センター』の設置状況リスト」（平成22年10月23日現在）
http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/hikikomori05.pdf（2010.11.25取得）

厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業（H19-こころ-一般-010），研究代表者・齊藤万比古（2010）「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」（「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究」）
http://www.ncgmkohnodai.go.jp/pdf/jidouseishin/22ncgm_hikikomori.pdf（2010.7.16取得）

厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業（H12-こころ-001），作成者：主任研究者・伊藤順一郎

(2003)「10 代・20 代を中心とした『ひきこもり』をめぐる地域精神保健活動のガイドライン――精神保健福祉センター・保健所・市町村でどのように対応するか・援助するか」(「地域精神保健活動における介入のあり方に関する研究」)
http://www.ncnp.go.jp/nimh/fukki/pdf/guide.pdf (2010. 11. 28 取得)
新井健治・奥山雅久 (2004)『ルポ　ひきこもり――心の叫び，家族の絆』埼玉新聞社
武藤清栄・渡辺健 (2001)『現代のエスプリ――ひきこもり』第 403 号，至文堂
富田富士也 (2005)「『ひきこもり』が生じる社会の背景とは」『保健師ジャーナル』第 61 巻第 12 号，医学書院
石川良子 (2007)『ひきこもりの〈ゴール〉「就労」でもなく「対人関係」でもなく』青弓社
浅田彩子 (2010)「ひきこもり当事者の『居場所』支援に関する分析――家族・当事者・支援者の視点から」『奈良女子大学人間文化研究科年報』第 25 号
竹中哲夫 (2007)「ひきこもる人のニーズの多様性と社会的支援――包括的支援の法制化を展望して」『日本福祉大学社会福祉論集』第 117 号
――― (2009)「ライフステージに対応したひきこもり支援――『ひきこもり状況』と支援課題」『日本福祉大学社会福祉論集』第 120 号
――― (2010)『ひきこもり支援論――人とつながり，社会につなぐ道筋をつくる』明石書店
Erik H. Erikson (1959) *Psychological Issues—Identity and The Life Cycle,* International Universities Press. (＝1982，小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房)
Barbara M. Newman and Philip R. Newman (1984) *Development Through Life—A Psychosocial Approach—Third Edition,* Dorsey. (＝1988，福富護訳『新版 生涯発達心理学』川島書店)
Erik H. Erikson and Joan M. Erikson (1997) *The LIFE Cycle Completed A Review Expanded Edition,* W. W. Norton & Company. (＝2001，村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル，その完結〈増補版〉』みすず書房)
岡本祐子 (2005)「中年期の危機と発達」岡本祐子編『成人期の危機と心理臨床――壮年期に灯る危険信号とその援助』ゆまに書房

〔参考文献〕

板東充彦 (2008)「ひきこもり者が『居られる』ためのサポートグループ活動の特徴に関する考察――特徴的な 3 事例の検討を通して」『心理臨床学研究』第 26 巻第 4 号，493–498
栗田明子 (2008)「ひきこもりが就労に向けてたどる心的プロセス――就労支援策の指針についての検討」『帝京大学文学部教育学科紀要』第 33 号，75–84
豊田弘司・森田泰介・岡本真彦 (2009)「居場所 (「安心できる人」) と個人主義および集団主義の関係」『教育実践総合センター研究紀要』第 18 号，33–38
堺泉洋・川原一紗ほか (2009)「『ひきこもり地域支援センター (仮称)』に望む支援」(「引きこもりの実態に関する調査報告書 ⑥ ――NPO 法人全国引きこもり KHJ 親の会における実態」)
http://www.khj-h.com/pdf/tyousa_6.pdf (2010. 7. 16 取得)
東京都青少年・治安対策本部 (2008)「平成 20 年度　ひきこもりの実態調査結果」
http://www.metro.tokyo.jp/INET/CHOUSA/2009/03/60j3u101.htm (2010. 7. 16 取得)